

## 5. 学修方法及び学修成果の評価方法に関する基本的な考え方

### (1) 学修方法について

家政学は、人間の生活を対象とした学問であることから、教育方法も理論的知識の教育と同時に、実践的な教育も同等の位置づけにある。食物、被服、住居、児童、家庭経営など多くの領域において、学修成果を上げるために、①講義形式 ②演習形式 ③実験・実習形式（教育実習や臨地実習も含む）④卒業研究・卒業論文の作成等さまざまな教育方法がとられている。

それらの方法は、教育する側のねらいや重点の置き方、学生の状況などに応じて多少の軽重を付け柔軟に組み合わせられるべきである。家政学を学ぶ上で、以下のような多様な教育方法が考えられる。

#### ① 講義形式

学生は、講義を通じて家政学の基礎知識から最先端の研究動向、さらには家政学の各領域における隣接および基礎となる他の学問分野の基礎理論や家政学との関わりを理解する機会が与えられる。家政学の基礎的概念・理論・命題などを正確に理解させるには講義は有効であり、家政学の見方、考え方、特異性をより深く学ぶための基礎となる。それが、他の教育方法による学習の基礎となる。また、学生は講義を一方向的に聴講するのみでなく、自分で考え、意見を述べる機会を含んだ双方向の講義などの工夫が必要である。また、視聴覚教材および多様なメディアを活用した授業の導入が効果的である。

#### ② 演習形式

実践と深く結びついた家政学を学ぶためには、食物、被服、住居、児童、家庭経営など多くの領域において生じている人間の生活に関わる事例や研究論文から、明らかにすべき諸課題を自ら発見し、それらの問題を分析し、その解決策を検索して行く問題解決型の学習が必須である。実際的問題の理解のために事例の検討やロールプレイングの実施も有用である。

#### ③ 実験・実習形式

家政学の各領域における実験・実習は、家政学を理解するために必要な知識とともに技術や技能を修得することをねらいとするものである。教育効果を高めるためには講義の内容とどう組み合わせるかが重要であり、理論と実践を結びつけて理解できる学修方法として不可欠である。実習形式には、教育実習や臨地実習、現場教育（インターンシップ制度）なども含まれるが、これらは実地体験から得られた課題発見、解決を通して、必要とされる専門的知識をさらに具現化する機会となりうる。

#### ④ 卒業研究・卒業論文の作成等

初年度より積み上げて来た家政学の対象とする「人間の生活」に関わる基礎知識や専門的な知識を基に、卒業研究・卒業論文を作成する。この教育方法は家政学の教育研究に長年取り組んで来た指導者の研究手法を参考にしながら学生が自ら問題を発見（課題を設定）し問題を解決して行く過程が重要である。研究の進め方としては学生と指導教員が個別に意見交換し、研究の方向性を相談する等の指導はうけるものの、最終的には学生自らの力で問題（課題）解決の糸口を見出して行く。指導者のアドバイスの下に自ら問題（課題）を解決するという過程を経ることで、自己学習能力が身についていく。理科学的実験研究、理学・社会学的調査研究、フィールドワー

ク調査研究と数学的処理研究，などを中心として，基本的手法・文献調査・研究発表と討論により能力を拡充する。成果の一つとして卒業論文を作成し，対人・社会コミュニケーションスキル，創造性，精神的強化を図ることができる。また，生活者の視点に立って課題を設定し追究していく過程を体得(経験)することで，それを実際の生活に還元する能力を身につけることができる。

## (2) 学修成果の評価方法

家政学における学修成果の評価方法は，それぞれの領域の教育目標、知識のレベル、教育方法などにより異なっており、多様で柔軟な評価方法がとられることが大切である。また、基本的素養を中心とした家政学的思考能力（家政学固有の視点）の修得・向上がなされたかという観点での評価が重要である。知識習得のレベルが評価される場合もあるし、知識やスキルを身につけて、ある課題を一定水準にまで達成することが評価される場合もある。

実験・実習などにおいては、実験・実習への取り組み方、そこで生じる事象への対応の仕方や、自らの実践の意図や計画を理論立てて説明できること、さらには、事後的振り返りや気づき、省察、考察などが評価に当たって重要な手がかりとなる。そこでも、一律の評価尺度や達成すべき水準の指標は必ずしも決められていない。従ってどの要素をどう評価していくかは、当該分野や事象に深い知識をもった評価者の高度な評価能力に依存することになる。

また、卒業研究の場合では、優れた着想で理論を展開したり、実験に取り組んだり、鋭い視点で情報を分析したり、調査を実施したりすることが学生に求められるような場面では、一律の評価尺度や達成すべき水準の指標が必要である。卒業論文の評価基準の例としては、着想の独創性や知見の重要性、先行研究の十分な吟味、実証や論述手続きの厳密さ、学術雑誌に投稿できる完成度の高い学術論文の書き方か否か、倫理的事項の取り扱い等が挙げられる。また、取組中に学生が感じ、考えたことなど、その過程についても個別講評などを含め適切な評価をすることも必須となる。それらのポイントの評価基準も含め、学会で発表できるレベルに到達すべく最低限度の指導も必要であるが、それに関しては当該分野や事象に深い知識をもった評価者の高度な評価能力に依存することになる。

家政学を学ぶものの評価は、このような多様な評価を組み合わせで行われることになる。